

「マンドリンに関する雑学」

以下、聞いた話やネットで集めた事柄をまとめたもので、文献等に当たったものではないので信憑性に欠けるものや間違いも含まれていると思います。予めご承知おきください。

■マンドリンオーケストラ／アンサンブルで使われる楽器にはどんな種類があるか。

[マンドリン]

- ・ 一般に知られているオーケストラや弦楽四重奏などのバイオリンに相当し、第1マンドリンと第2マンドリンに分かれる。(※楽曲によっては第3マンドリンなどもある)
- ・ 通常、1st (ファースト)、2nd (セカンド) と呼ぶ。バイオリンだと、ストバイ、セコバイなどと呼んだりする。
- ・ イチジク又は洋ナシを二つに割ったような丸い胴体をもつ。そのため、バイオリンやギターのように明確な横板は無い。(フラットマンドリンを除く)
- ・ 薄くて細長い木材をいくつも張り合わせた半球形の裏板が表板に連なる。
- ・ 弦は全部で8本張られるが、2対の同音の弦を張るため、4弦の働きをする。これを4コース8弦と呼ぶ。
- ・ 第1弦、第2弦は鉄線で感傷的。1弦は鋭く、2弦は温和な音色。
- ・ 第3弦、第4弦は鋼芯の巻線。3弦は甘く、4弦は深い音色。

[マンドラテノール]

- ・ 音がマンドリンよりちょうど1オクターブ低い。
- ・ ビオラよりもちょっと音域が低くチェロよりも高い。
- ・ 正式名称はマンドラテノール (テノール) ですが、通常マンドラと呼ぶ。
- ・ ビオラと同じ音域のマンドラコントラルトという楽器もあるが、あまり使われない。

[マンドロンチェロ (セロ)]

- ・ 一般のオーケストラのチェロと同じ音域。
- ・ ボディが大きいので、音に重厚感がある。
- ・ メロディを受け持ったり低音域の支えとして機能するが、楽曲によっては打楽器的に使用。

[マンドローネ]

- ・ マンドロンチェロよりもさらに一まわりも二まわりも大きく、マンドリン属の最低音楽器。
- ・ 比較的珍しい楽器で、全国的にみても数が少なく、通常はコントラバスで代用。

[クラシックギター]

- ・ 一般のオーケストラの通常編成に無いのが、このギター。
- ・ 小さなオーケストラと言われるほどの表現能力を持っている。
- ・ マンドリン合奏では、伴奏としてギターが使われることが一般的。
- ・ 最近の作品ではギターに効果的なメロディーを使う楽曲も少なくない。

[コントラバス]

- ・ マンドリンオーケストラの最低音を担当。
- ・ ギターやマンドリンが撥弦楽器（つま弾く楽器、プレクトラム楽器）であるのに対して、コントラバスはアルコ（弓）を使用する擦弦楽器。ピッチカートで撥弦楽器としての機能もある。
- ・ 1920年頃、コントラバスの代用としてギターを大型にしたようなギタローネという楽器があった。

[クワルティーノ]

- ・ マンドリンより4度高く調弦する小型のマンドリン。
- ・ 愛の喜び (J.P.A. マルティーネ / S. ラニエーリ編)、歌劇「ルスランとリュドミラ」(グリーンカ / 中野二郎編)、ウクライナの思い出 (A. フェッライス) などの楽曲で使用される。

[ピッコロマンドリン]

- ・ クワルティーノよりもさらに高く調弦する小型のマンドリン。
- ・ マンドリンの1オクターブ上。

[マンドリュート]

- ・ マンドロンチェロにもう1コース高い方に増やした、EADGCの5コース10弦を持つ。
- ・ どちらかというに独奏用に考案され使われる楽器。

[フラットマンドリン]

- ・ ボディの後ろがフラットな（平らな）マンドリン。
- ・ ブルーグラス音楽で多く使用されている。エレキマンドリンやエレキマンドチェロなどもある。

■Mandolinは何語でしょう？

- ・ 答えは“英語”
- ・ イタリア語ではMandolino（マンドリーノ）といいます。
- ・ マンドリンの歴史を少し遡るとマンドーラ（Mandora →Mandola）という楽器に辿りつく。現代のマンドラとは全く異なったもの。
- ・ マンドーラに改良を加え、小さくしたものがマンドリーノで、イタリア語で小さいという意味の語尾をつけた言葉。

■マンドリンの歴史

マンドリンの歴史をずーっと大昔まで遡ると「ウード」という紀元前 19 世紀の南西アジアまで辿り着くようです。ここまで遡ると人間の祖先は古代の海に住む単細胞生物、というような感じで実感はありません。このウードは 9 世紀頃にヨーロッパに渡り、15 世紀から 17 世紀にヨーロッパの宮廷で人気があったリュートに変化していきます。このリュートがマンドーラ（マンドウラ）に変化し、マンドーラを小型にしてマンドリーノと名づけたのがルーツのようです。そのマンドリーノは、弦が金属ではないガット弦で 6 コースあったようです。単弦の 6 弦のものと複弦の 12 弦のものがあったようです。この頃は 1600 年代で、ミラノ型マンドリンとかバロックマンドリンとか呼ばれています。時代を経るにしたがって単弦 6 コース→複弦 6 コースと変移していったものを思われます。バロック末期にヴィヴァルディの楽曲（例えば『マンドリン協奏曲 ハ長調 RV.425』）があるように、バロックの時代にマンドリンを使った曲が作られています。だいたい通奏低音（オルガン、チェンバロ、リュート、ハープ、ギター、ヴィオラ・ダ・ガンバ、チェロ、コントラバス、ファゴットなど）とマンドリンというパターンでした。しかし、この当時のマンドリンは小型の楽器としてヨーロッパの人に親しまれていましたが、木製の糸巻き+ガット弦という構造のため大きな音が出ず、フレットも現在のものより少なかったため演奏能力に乏しく、メジャーな楽器にはなり得なかったようです。

今、盛んに用いられているマンドリンは、19 世紀中頃（1850 年頃）パスクワーレ・ヴィナッチャという楽器製作工が大幅に改良を加えたものです。具体的には、4 コース 8 弦で金属弦を使用し、そのために糸巻きも頑丈な金属機械式糸巻きを用い、フレット数を増やしたものが原型になっています。ナポリ型マンドリンと云われています。この改良型のマンドリンは演奏能力が向上し、当時の人たちに人気が出て盛んに演奏されるようになり、1800 年代後半からマンドリンのソロや合奏のための曲がたくさん創作され、この時期の秀逸な曲は今でも多く演奏されています。我々は、オリジナル曲とか、イタリアオリジナル曲、略して“イタオリ”と呼んだりしています。

日本にマンドリンが伝えられたのは 1901 年、比留間賢八が最初といわれています。日本に入ってきたマンドリンはギターとともに演歌の伴奏楽器として扱われ、哀愁を帯びたトレモロの音色は日本人の心を深くとらえることになりました。古賀政男による曲はみなさんご存じのことだと思います。その一方、イタオリや邦人作曲家による楽曲などが盛んに演奏されるようになりました。祖国イタリアだけでなく、ドイツやアメリカ、日本でも隆盛を極めました（1960 年代～70 年代）、現在では日本が最も愛好者が多い国だろうと思います。

■マンドリンオーケストラ

ヨーロッパでマンドリンの愛好者が増加するにつれて、大人数で合奏するマンドリンオーケストラが誕生した。しかし、通常のオーケストラに比べ音量が劣るなどの欠点を克服できず、ヨーロッパでは、ドイツで生まれたツップオーケストラ（マンドリンオーケストラ）を除き、現在では衰退してイタリアでも少ししか存在していない。もちろんイタリアでは、アンサンブルやデュオ、ソロなどは今でも盛んであると思われる。一方、日本ではトレモロを主体としたマンドリンオーケストラが昭和初期よりアマチュア団体を中心に盛んになり、戦後は学生を中心とした団体により支えられ、現在は社会人団体が全国各地に存在し音楽界のなかで独特の地位を築いている。

日本人によるマンドリンオーケストラの作品はプロ・アマ問わず盛んで、現在も多くの優れた作品が世に送り出され続けている。

■マンドリンの奏法

大きく分けて2つの奏法がある。

ピッキング奏法

ピックで弦をはじいて音を出す。ピッキングにはピックを上から打ち下ろすダウンピッキングと下から打ち上げるアップピッキングがある。ちなみにダウンもアップも同音の2本の弦(復弦)を同時に弾くのが原則である。これを平衡奏法といいます。

ピッキング奏法にはいろいろとバリエーションがあるが、例えば「滑走アルペジオ」というのがあり、3コースあるいは4コースに渡って連続してダウンとアップの往復をする奏法です。

トレモロ奏法

トレモロ奏法とは、ピックによってダウンアップを高速にくり返し、弦を連続して弾きつづける奏法である。マンドリンといえばトレモロ奏法というイメージが強く印象づけられている。また、トレモロの速さに変化をつけることにより演奏表現に変化をつけることができる。

■ミラノマンドリンの調弦

ミラノ型マンドリンについては6単弦のマンドリンとして親しまれていたものですが、意外と歴史は古く1600年代後半にはすでに存在していたようです。明らかなのは1725年生まれとされるミラノのアントニオ・モンティーノ(Antonio Monzino)が6代にわたって製作していた名門とされ、一説によるとこの人がミラノマンドリンを発明したといわれています。やがて19世紀末期にはカシーノ社(イタリア)が金属弦の複弦楽器として6コース12弦のマンドリンを登場させて以来、Oscar Schmidtなどが製作していましたが、単弦のマンドリンも12弦のマンドリンもやがて歴史から姿を消します。ちなみに20世紀初頭から登場している12弦マンドリンのなかには3弦を一セットで4コースに張るものも多く見られます。

■マンドリンの紹介と歴史

古代由来の楽器を19世紀中頃イタリアで大改良されて生まれた撥弦楽器(弦を弾いて音を出す楽器のこと。ほかにギターなど)。金属弦が繊細で優美な澄んだ音を出し、ドイツ、イタリア、そして日本で愛好者が多い。日本伝来は約100年前。本家イタリアでは20世紀前半まで隆盛を極めたがその後下火になり、現在、日本が世界一の愛好者人口を持つ。イタリアのカンツォーネなど民族音楽で用いられるほか、イタリア・ドイツなどで作曲されたマンドリンオリジナル曲など、またクラシックの作曲家もヴィヴァルディやベートーベンなどがマンドリンのための楽曲を作曲している。映画「クレイマークレイマー」で使用されている曲は、ヴィヴァルディのマンドリン協奏曲ハ長調RV425。日本ではほかに邦人作曲家によるマンドリンのための多数の楽曲がある。

■マンドリンの形状と奏法

イチジク又は洋ナシを半分に切ったような形の胴体にフレット付きの指板がついており、調弦はヴァイオリンと同じ(高音からEADG)であることから19世紀~20世紀初頭のヨーロッパではヴァイオリンの代替楽器としても愛用された。4種類の音の高さの弦をそれぞれ2本ずつ計8本張り、鼈甲やプラスチックで作られた小さなハート型のピックで弦をはじいて音を出す。主な奏法に、ピックで弦を弾くピッキング奏法と、同一音をピッキングのダウンアップで反復し持続する音の様に聴かせるマンドリン属に特徴的なトレモロ奏法がある。その他、アルペジオ奏法、デュオ奏法(伴奏と主旋律を同時に弾く)、トリオ奏法(トリオ奏法は3音同時)、ハーモニクスなどがある。

■マンドリンの仲間

マンドリン族には、

- ・ マンドリンの一オクターブ低い調弦で、中音域の音がする「マンドラ・テノール」
- ・ ヴァイオリンチェロと同じ調弦 (ADGC) で、低音域の「マンドチェロ」
- ・ マンドリン族で最も低い調弦の「マンドローネ」

がある。形は、マンドリンとほぼ同じだが、音が低くなるにしたがって、楽器が大きくなる。これらの楽器に、クラシックギターとコントラバスを加えて合奏をするのが日本では一般的である。時には、フルートやクラリネットを加えた編成で合奏をする。

さらに、マンドリン族には、

- ・ マンドリンより4度高く調弦する小型のマンドリンの、「クワルティエーノ」
- ・ ヴィオラと同じ調弦の、「マンドラ・コントラルト」
- ・ (EADGC) の5コースの弦を持ちマンドラ・テノールとマンドチェロの音域を併せ持つ「マンドリュート (リュート・カンタービレ)」

なども存在する。クワルティエーノやマンドラ・コントラルトは一般的には用いられず、特別な曲に使用される。また、マンドリュート (リュート・カンタービレ) は、主に独奏用に考案された楽器である。

■日本でのマンドリン受容史

日本でのマンドリン受容史においては、歌謡曲にもマンドリンが使われている。特に、大正12年に明治大学マンドリン倶楽部を創設した古賀政男の足跡は非常に大きく、日本的な哀愁を帯びた古賀メロディー (『影を慕いて』『丘を越えて』『誰か故郷を想わざる』『悲しい酒』など。生涯作曲数は3000とも4000とも言われる) は日本におけるマンドリンやギターの普及と愛好に貢献し現在もなお愛されている。

また、CMやドラマなどのBGMとしてもしばしば用いられているが、愛好者層が限られていることから必ずしもその音色が多くの人に膾炙されているとはいえず、それがマンドリンの音であることに気づかれていない場合も多いものと思われる。

■マンドリンの歴史と語源

マンドリンの祖、パンドゥーラ (Pandoura) は、その昔ギリシアの牧神パンの神が創製したと言われています。そのパンドゥーラが中世のリュートを経て、パンドゥーラとなりました (ギリシア語の「パン」は「マン」「タム」にととても変わりやすい言葉であり、誰がパンドゥーラとしたかは不明)。

このパンドゥーラは、後のマンドリンより形状がやや大きく音も低かったので、1620年頃、イタリア・ベネチア近くパドゥアに住んでいたカラストロ・パロッキア (Calastro Parochia) によって改良が加えられ、高音のマンドリン (Mandolino [伊]、Mandoline [独]、Mandolin [英]) が製作されました。イタリア語でパンドゥーラという楽器を改良し小さくしたものであることから、その名も「小さい (lino, line, lin) パンドゥーラ」=「マンドリーノ」 (Mandolino)、英語名「マンドリン」 (Mandolin) と呼ばれるようになったわけです。

さらに現在使われているマンドリンは、主に19世紀になってイタリア・ナポリで改良が加えられたナポリ型マンドリンと呼ばれているものです。

「マンドリン」となるまで

Pandoura – Mandoura – Mandouralino – Mandolino – Mandolin